新入生を迎えることば

田畑　雅英

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。ご列席のご家族、ご関係の方々にも、心よりお祝いを申し上げます。あわせて、お忙しい中をご臨席賜りました来賓の皆様にも厚くお礼申し上げます。

例年、入学式の時には学内の桜の時期が過ぎていることが多いのですが、今年は桜の開花が例年より遅めで、皆様の入学をお祝いするために開花を待っていてくれたように、ちょうど良い状態で咲いております。ご家族の皆様も、お時間が許すようでしたら大学内に足をお運びいただいて、美しい桜と、あわせてキャンパスの様子などもご覧いただければ幸いと存じます。

さて、昨年、宮崎駿監督の『君たちはどう生きるか』というアニメ映画が公開されました。アカデミー長編アニメ賞も受賞して話題になりましたし、ご覧になった方も多いのではないかと思います。この映画のタイトルは 1937 年に出版された吉野源三郎の同名の小説に由来していますが、その直接のアニメ化ではありません。それにしても、私はこのアニメ映画の広告を最初に見たとき、非常に懐かしいというか、今この時代に「君たちはどう生きるか」というタイトルをもったアニメ映画が製作されることにちょっと意外な気もしました。私は今から 50 年以上前、小学校 6 年生の時に、担任の先生に薦められてこの本を読んだ記憶があるのです。

この小説は、旧制の中学 2 年生、15 歳のコペル君というあだ名の少年が、日常のさまざまな体験や人間関係から、気づいたこと、悩んだことなどを叔父に話し、それについて叔父が「おじさんのノート」という形でかなり長い意見を述べるという形式で書かれていて、そのやり取りを通してコペル君が成長していくという、通常の小説とはかなり趣が異なった作品です。今日の目から見ると、戦前の古い倫理観や人間観が反映されている部分もあり、批判されることもある作品ですが、いくつかの点は今日でもなお十分に通用すると思います。その一つをあげてみます。

コペル君というあだ名は地動説を唱えた天文学者のコペルニクスから来ています。コペル君の叔父さんは、天動説が信じられていたのは、一つには人間が自分を中心として、ものを見たり考えたりする性質を持っているためだと述べ、人間のものの見方や考え方も、子供のころは天動説のようにすべて自分中心にまとめられているが、大人になるにつれて多かれ少なかれ地動説的なものの見方をするようになり、巨視的な、あるいは客観的なものの見方ができるようになってくるはずなのに、実際は大人になっても、自分を中心として物事を考えたり判断したりする性質は根深く残っていて、ことに自分の損得に関わる場合に、自分中心の考え方を抜け出すことは難しい。しかし、自分たちの地球が宇宙の中心だという考え方にかじりついていた間、人類には宇宙の本当のことがわからなかったのと同様に、自分ばかりを中心にして物事を判断していくと、世の中の本当のことも、ついに知ることができないままだと述べています。

私もこのことはぜひ皆さんの心に留めておいてほしいと思います。自分を判断の中心とせず、

他者と対等の、多くの中の一つと考えて、他者との対等の関係を築いていくことは、易しいことではありませんが、多様性を含んだ世界の中で生きていくためにはどうしても必要なことです。

この『君たちはどう生きるか』の中で、叔父さんはコペル君に対して、さまざまな問題をきっかけにかなり具体的に生き方や考え方の指針を示しています。場合によってはその教えを古いと感じたり、反撥したりする人もいて当然です。人の生き方に正解というものはなく、どう生きていくかはそれぞれの人が自分なりの答えを見つけていくしかありません。コペル君は最後に自分の将来の生き方について、「すべての人がおたがいによい友達であるような世の中になるために役立つような人間になりたい」と決意を述べるのですが、それはコペル君の出した答えであって、一つの例にすぎません。だからこそこの本は、最後にあらためて読者一人一人に「君たちはどう生きるか」と問いかけているのです。

これからの大学生活の中で、皆さんはそれぞれにその答えを探してみてほしいと思います。そのための手がかりは、正課の授業や正課外の活動、アルバイトやボランティアの体験、友達や先生との語らい、読書やさまざまなメディアのコンテンツを見たり聞いたりすることなど、大学や短大での生活の中のあらゆるところに潜んでいます。あせらず、じっくりと、時には努力もし、そして決して自分中心に陥らないように、楽しみながら、ぜひまだ知らない自分、よりよい自分を見つけてください。

栄養科学研究科に入学された皆さんにも一言申し上げます。コペル君の物語にもおかずが油揚げだけの弁当という話が出てきますが、栄養に対する一般の関心はコペル君の時代と現在までの間に大きく変わったと思います。健康が単に「病気でないこと」とイコールなのではなく、人が生きていくうえできわめて重要な積極的価値として一般に広く認識されるとともに、栄養に関する関心も非常に高くなりました。それだけに非科学的な誤った言説も横行して、人々が惑わされるという例も珍しくありません。もちろん学問は実益に資する面だけでなく、真理追求という自律的な価値を持つことは言うまでもありませんが、栄養学を専門的に研究しようとする皆さんに社会がかける期待には非常に大きなものがあります。どうかさまざまな困難にめげず、優れた研究成果をあげられることを願っております。

社会起業研究科の新入生の皆さんにも一言申し上げます。『君たちはどう生きるか』が今日でも評価されている点の一つは、人生をどのように生きるべきかという問題は、一見モラルの問題に見えるが、しかしモラルだけを自律的にとらえることはできず、そこには必ず社会科学的な認識が不可分に結びついているということを示した点です。ある意味で現在は社会科学の時代であるように思われます。とくに社会起業研究科に学ぶ皆さんは、実社会をフィールドにして、現在最もアクティブな、最も社会から必要とされる領域の一つにおけるエキスパートになろうとしています。一方で他者への影響も大きく、責任の最も重い分野の一つでもあります。そのことを忘れず、しっかりと研鑽に励んでいただきたいと願っています。

最後に、本学はこの４月１日に附置研究所として「相模女子大学日本学国際研究所」を設置しました。日本学とは、広く日本に関わるさまざまな対象を国際的な視点から研究しようとする学

問で、先ほどのコペル君の話と同じように、日本中心の天動説ではなく、地動説のようにより広い視野から、日本の文化や社会を考えようとするものです。この研究所はいわば皆さんと同じ 1 年生ですが、皆さんと共に成長し、広く研究成果を学内や社会に還元できるように努力していきたいと考えております。

以上をもちまして、新入生を迎えることばといたします。